

(1) 実態調査から把握した 12 の課題<sup>1</sup>

## 課題1 保護者・子どもの心身の健康

困難を抱える保護者は、心身の健康状態がよくない傾向がみられました。子どもに治療していない虫歯がある割合が相対的に高い傾向がみられました。

## 課題2 保護者の就労状況

困難を抱える保護者は、常勤・正規職員の割合が低い傾向がみられました。

## 課題3 家計のひっ迫と子どもへの影響

家族が必要とする食料を買えない経験が「よくあった」「ときどきあった」と、困窮層<sup>2</sup>の4割超、ひとり親世帯(2世代同居)の約2割が回答しました。

## 課題4 親と子の愛着関係・基本的信頼感

困難を抱える保護者は、行き過ぎた体罰を与えた経験やDVなどを経験した割合が高い傾向がみられました。困窮層<sup>2</sup>の子どもは、家族の仲が良くないことを悩みと回答した割合が高い傾向にありました。

## 課題5 子どもの基本的な生活習慣

困難を抱える子どもは、朝食を毎日食べない、毎日同じ時間に寝ていないなど、生活習慣が整っていない傾向がみられました。

## 課題6 子どもの居場所

ひとり親世帯(2世代同居)の小学5年生の6人に1人が平日の放課後を一人で過ごしていると回答しています。

## 課題7 子どもの学習環境と学習習慣

困難を抱える子どもは、学校の宿題をしていると回答した割合がやや低く、学校の授業以外で勉強しないと回答した割合が高い傾向にあります。

## 課題8 子どもの学力・学校生活

学校の授業がわからないと回答した小学5年生の約4割は、小学校低学年(1・2・3年生)のころから授業がわからなかったと回答しました。

## 課題9 子どもの進路・将来展望

子育てに関する悩みごととして、困窮層<sup>2</sup>の中学2年生の保護者の約8割が「子どもの教育費」、「子どもの進学や受験が心配」と回答しました。

## 課題10 子どもの自己肯定感

困難を抱える子どもは、「自分のことが好きだ」と思わない割合が全体と比較して高く、いわゆる「自己肯定感」が低い傾向がみられました。

## 課題11 社会的孤立・支援につながらない

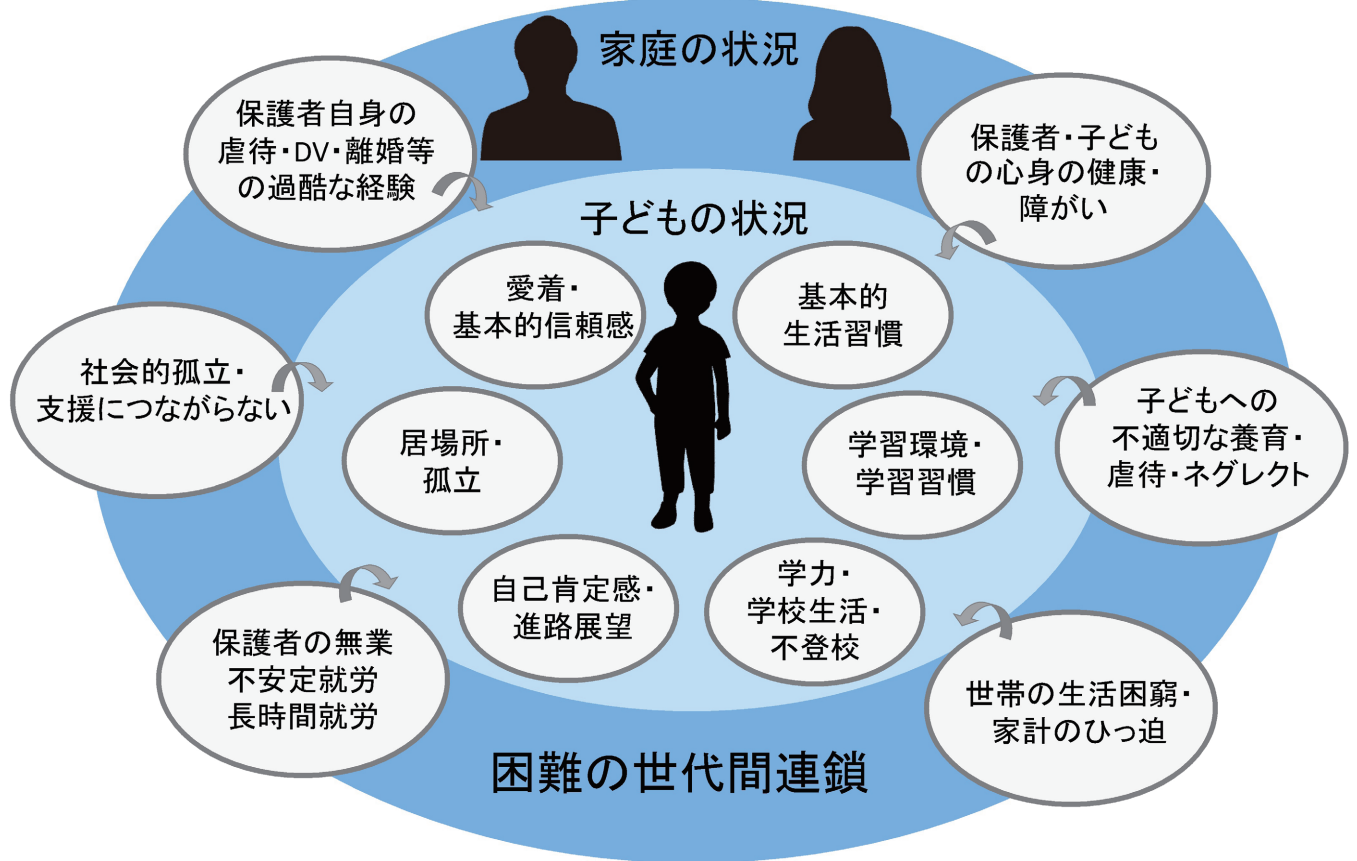
困難を抱える保護者は、支え手伝えてくれる人がいない割合が高く、子どもには、大人に上手く相談できない割合が高い傾向がみられました。

## 課題12 困難の世代間連鎖

経済的困窮、暴力(行き過ぎた体罰)や離婚経験等について、世代を越えて連鎖する傾向がみられました。

1 2018年(平成30年)に実施した「藤沢市子どもと子育て家庭の生活実態調査」より抜粋。子どもや子育て家庭の健康や生活の状況、子どもの学習や経験の状況、保護者の就業や家庭の収入の状況、子どもや子育て家庭の抱える課題や支援ニーズ等について、広く実態を把握することを目的にアンケート調査とヒアリング調査を実施しました。

2 「困窮層」とは、「藤沢市子どもと子育て家庭の生活実態調査」の中で、「生活困難」の判定要素(①低所得、②家計のひっ迫、③子どもの体験や所有物の欠如)のうち、2つ以上に該当する層と定義しています。



## (2) 課題のまとめ

- 地域・家庭・職場といった人々の生活の場面で、地域の相互扶助や家族同士の助け合いなどの支え合いの機能が弱まってきています。
- 子育て家庭の孤立化、共働き家庭の増加、ひとり親家庭の増加、親世代のライフスタイルの変化、親になるための経験の不足といった家族機能の弱体化と相まって、近隣のつながりの希薄化、地域の子育て力の低下により、子育てへの不安や負担感を感じながら子どもと向き合わざるを得ない状況にあります。
- 困難を抱える子どもの背景には、子どもだけでなく保護者を含め、疾病や障がい、経済的困窮、不適切な生活習慣や学習環境、多様な経験の不足、低い自己肯定感、社会的孤立等、様々な側面で課題を抱えている傾向がみられました。
- 子ども・若者や子育て家庭が抱える課題を、複合化・深刻化させないために、予防的な関わりや、課題に対する早期の対応が重要です。また、すでに複数の重層的な課題を抱えている場合には、分野横断的な「世帯丸ごと」の対応が必要です。
- 複雑に絡み合う課題を抱える子どもや保護者を支援し、困難の世代間連鎖を断ち切るために、関係機関の連携・協働体制のより一層の強化が求められています。
- 子どもや子育て家庭が抱える困難を自己責任とする考えから、社会全体が受けとめる課題と捉え、地域全体で取り組むことが重要です。子ども・若者、子育て家庭への「あたたかいまなざしとつながり」のあるまちづくりが求められています。